文学・芸術

歴史的な行為としての翻訳の意義に迫る

言語は体系ではない。出来事である

柿木伸之

小山 亘 編著
▶翻訳とはなにか
記号論と翻訳論の地平――
あるいは、世界を多様化する変換過程について
9・10刊 A5判562頁 本体6200円
三元社

言語は体系ではない。出来事である。ただしその場は、歴史が刻まれた特定の社会的な文脈であり、そこに生じる接触が言語という出来事を引き起こす。そして、そこにあるのは「コミュニケーション」と呼ばれる記号の作用である。『翻訳とは何か　記号論と翻訳論の地平――あるいは、世界を多様化する変換過程について』の著者（編著者）は、接触の出来事から絶えず歴史的に生成する動態において言語を見据えている。本書は、そのような視座から、この出来事の一様態として翻訳という行為を捉え直そうと試みるものと言えよう。

このとき基本に据えられるのが、ヤコブソンの「一般化された翻訳」の理論である。それは翻訳を言語内翻訳、言語間翻訳、記号間翻訳に分類するが、著者によれば、翻訳されるのは一般に「言語的」と見なされる要素だけではない。それゆえ「翻訳は一義的には記号間翻訳である」。しかも翻訳は、記号の作用を意味の次元だけでなく、社会的な次元でも「メタ語用」的に表わすという。翻訳とは、ある社会の歴史的文脈における特定の「言い方」を別な――メタファーを含む――仕方で具現する、一種の「儀礼」でもある行為なのだ。

この行為の出発点にあるのは、つねに接触の出来事である。それは「偶発的」なものであるほかはない。それゆえ翻訳の過程自体は多様化に開かれているはずだが、歴史的にその過程は、特定の言語やテクストの規範化へ向かった。その視点から統一体として数え上げられる言語が標準化され、それ以外のものが「方言」として周縁化されたり、特定のテクストが正典化されたりしてきたのだ。著者によれば、そのような「言語」と呼ばれるものの歴史によって形成されたのが、「（西洋）近代の言語イデオロギー」にほかならない。

その現われとして著者が挙げるのは、「母語」という神話であり、翻訳における「等価性」の神話である。本書の課題の一つは、これらの神話の姿で人々を呪縛してやまない「言語」の歴史とそのイデオロギーの解体である。著者は、ギリシア語文献をその文化的枠組みもろとも吸収するような翻訳によって、あるいはヒエロニムスによる聖書の翻訳をつうじて標準的なラテン語が歴史的に形成され、ヨーロッパ各地に規範として浸透していく過程を詳述する。それは、権力関係を含んだ社会をその文化とともに築いていく歴史なのである。

著者が導入する社会言語学の視点からすれば、「公用語」として一定の地位を保っている言語は、こうした歴史の産物である。他方でそのような「言語」に対して従属的な地位に置かれたり、「少数言語」と分類されたりしている言語も、支配的な言語とのせめぎ合いのなか、今も生成しつつある。本書はその過程もつぶさに辿っている。その叙述を貫く言語人類学の視座に立てば、どの言語も「地方言語」ないし「方言」ということになるが、それと「標準語」との階層秩序が生じるのはなぜか。

この問題を著者は、言語とその文化を差異とともに作り出す翻訳の働きから解き明かそうとしている。ある接触の場面において、一方の記号の作用と他方のそれとの対照が際立つ場合に、翻訳が二項対立を、さらには両者のあいだの支配と被支配の関係を仮構してしまうのである。その見方は、泊井直樹が示した「対＝形象化の図式」を思い起こさせる。こうして「二重体（ダブレット）」と著者が呼ぶものが生じるところに、ある言語が「標準語」として、「ピジン」などに優越して存在するというイデオロギーの起源があるという。

この西洋近代のイデオロギーが日本列島を含む非西洋にも浸透しながら、人は「母語」を持つという神話を生み、翻訳を言語間翻訳に局限していった。それとともに、翻訳の「等価性」という目的が神話的に想定されるようになる。ただし、このイデオロギーの影響は根強い。著者によれば、言語の支配的もしくは従属的な地位を規定してきた歴史を見通しつつ、マイノリティでもある他者の言語の潜在力を汲み出す翻訳の可能性にも開かれようとする現代の翻訳の理論も、「言語」というイデオロギーの呪縛を免れてはいない。

それはポストコロニアルな翻訳論が「語りとアイデンティティ」の「交点」のみを焦点とするに終わり、記号の意味する働き、その社会的で文化的な効果など「語用」のいくつもの層の「全体」を視野に入れて翻訳を論じるには至っていないからだという。そのような洞察の下、つねに一つの全体である言語の出来事として翻訳という行為を浮き彫りにする議論の射程はきわめて広い。ユダヤ＝キリスト教史を規定する聖書翻訳の歴史、それを動かした言語の歴史、さらにはクレオールを含む世界各地の言語の展開を視野に収めている。

このようにして歴史的な行為としての翻訳の意義に迫る本書は、言語が出来事であることと同時に、それを動かす翻訳の力を、広大な地平の下であらためて考えさせる。その一方で、体系への強い志向を持った著者の議論には、現代の翻訳の理論と実践を含む翻訳への多様なアプローチを俯瞰的に色分けしてしまう危うさも感じないではいられない。それによって、例えば著者が親近感を示すベンヤミンの翻訳論が、近代の「言語」を内側から突破する道筋を拓こうとする試みであることは見えにくくなるのではないだろうか。

現代の翻訳論に影響を与えたベンヤミンの「翻訳者の課題」は、他者の言葉を翻訳するなかで「固有の言語」という「朽ちた柵」を破壊し、他者の言葉の「こだま」を別の言語に響かせる可能性を示した。そして彼によれば、ここに生まれる未聞の異言には、何かを直接に語り出す言語そのもの――「純粋言語」――が萌している。忘れられてはならないのは、この出来事が「言語」の体制を内側から揺さぶることである。記号論を出発点に、社会言語学と言語人類学を横断する『翻訳とはなにか』の巨視的で浩瀚な論述から多くを学びながら、言語の「死後の生」の余地を開く内在的で微視的な翻訳の理論の歴史的な意義を掘り下げたいと考えた。

（哲学、美学）

学術

お腹がぐーっと鳴る母娘の物語

オンマ（お母さん）への想いに溢れている

上林香織

ミシェル・ザウナー 著
雨海弘美 著
▶Hマートで泣きながら
10・30刊 四六判三一八頁 本体二〇〇〇円
発行・集英社クリエイティブ／発売・集英社

本書は、白人の父と韓国人の母の間に生まれた著者ミシェルが、オンマが韓国にいる実の妹を癌で亡くしてから絵画教室に通いはじめたことを知っていたが、遺品の中からスケッチブックを見つけ、オンマの上達振りと創造

っていて、ひとつも無駄なものがない。ひとつひとつすべての人間としてとらえ直す過程を私たちは目にする。無意識かもしれないが、本書の前半、ミシェルは母親の名前を呼ばず、「ミシェルのママ」としての母親しか描いていない。亡くなってから初めてファーストネームが明らかになる。